

# 「ダルクローズのリズム教育」

— 音楽と身体の動きを中心に —

香山 知子

## I 研究目的

幼児期の音楽リズム教育は、音楽的側面と身体的側面（動きのリズム）を共有し、その両面から幼児の創造的自己表現活動をとらえていくことができよう。

本研究は、身体の動きを通して音楽教育の独自の方法を確立したエミール・ジャック・ダルクローズ (Emile Jaques Dalcroze 1865~1950) のリズム教育を、音楽と身体の動きの関連性から考察し、現代の音楽リズム教育におけるひとつの視点を求めようとするものである。

## II 研究方法

ダルクローズの著書並びにダルクローズ研究書による文献研究。（原著及び和訳を比較検討した。）  
対象文献

- ① E. J. Dalcroze "Le rhythm, la musique et l'education"  
(paris:Fishbacher 1919年)  
板野平訳「リズムと音楽と教育」  
(全音楽譜出版社 1975年)
- ② E. J. Dalcroze "The Jacques-Dalcroze Method of Eurhythmics; Rhythmic Movement" (ondon:Novello and Company: 1920年)  
板野平訳「リズム運動」  
(全音楽譜出版社 1970年)
- ③ Frank Martin "Emile Jacques Dalcroze ; L'homme le compositeur le créateur la Rhythmique" (Baconniere 1965年)  
板野平訳「エミール・ジャック・ダルクローズ」  
(全音楽譜出版社 1977年)
- ④ Elsa Findray "Rhythme and Movement Application of Dalcroze Eurhythmics" (summy 1971年)  
小野進訳「ダルクローズ・リトミックによるリズムと動き」  
(全音楽譜出版社 1973年)

対象文献の(1)に関しては、K J 法的手法を用い、リズム教育に関する論述文章 302 箇所を抽出し、そのうち音楽と身体に関する論述箇所63について分類考察した。

## III 結果及び考察

ダルクローズのリズム教育論における音楽と身体の動きについて、4つの観点からその関連が述べられよう。第1に、音と動きとリズムの関係

であり、これは、音楽と身体の動きの前提となる包括的なとらえ方であり、第2に、筋肉感覚とリズムの関係は、ダルクローズ・メソッドの中核をなすものであり、第3に、音楽と身体の動きと感情についてはさらに2分類され、(1)身体の動きと感情についての関係、(2)音楽と身体の動きと感情についての両面から考察でき、第4に、身体の動きを音楽芸術に類似した芸術であるとみなしているという観点から考察できよう。

### a 音と動きとリズムの関係について

「音楽は音と動きから成り立つ」（対象文献① p.43以下同様）と述べられている様に、音楽の成立要因として音 (la sonorité) と動き (le mouvement) が並列されている。（ここでの「音」は、響き、音色、高さ、強さの全体をもった音の響くととらえられ、単に音というとは異なる。）さらに、「音楽の2つの重要な要素はリズムと音である」（① p.49）とされているが、このリズム (le rythme) と音 (le sonorité) の関連については、「音は (le son) は二義的に動きを型づくるものであり、一義的にはリズムが動きを型づくる」（① p.43）のように、音と動きの間には、リズムが媒体として重要な位置を占めていることが推測される。（和訳では、le son と la sonorité 共に「音」とされている）(① p.46) また、リズムと動きについては、「音楽で最も有力な要素であり、人生に最も密接な関係があるものは、リズムそして動きである。」(① p.57) と述べられている。（和訳では、「リズム運動」 (le rythme·le mouvement) としているが、「リズム運動」の語は、他に le mouvement rythmé の訳とされていることから、この部分は上記のように捉えた。）(① p.63)

### b 筋肉感覚とリズム、音楽的ニュアンスについて

ダルクローズは、「内的聴力 (inner ear, une oreille intérieure)」を「すべての機能を形成するのに必要な器官」として定義し、まず、「頭脳や耳や喉頭を開発する」ための練習を考案し始めた。(① p.10)

そして、「聴感覚をさらに完全にするため筋肉感覚 (muscular sensation, les sensations musculaires)」を提唱し始めた。この筋肉感覚については、「音の響が浸透することによってつくられた生理的現象」と定義しているが、つまり具体的には、「音高のニュアンスだけではなく、強弱の勢いや、動きのいろいろな速度をも感知することが必要である。」ということを示していると考えられる。(① p.48, 49) ここでいう「強弱の勢い (l'énergie dynamique)」は、「エネルギーに関するすべてのニュアンス — フォルテ、ピアノ、クレッシェンド、ディミヌエンド」を指していると推測され、「動きのいろいろな速度 (plus ou

moins grande rapidité des mouvements)は「時間に関するすべてのニュアンス — アレグロ、アンダンテ、アツェレランド、リテヌート」を指していると考えられよう。(① p.57)これらのニュアンスを「単に耳からだけでなく、筋肉感覚からも感知されなければならない。」と強調している。同様にリズムの感知についても「聴覚と筋肉感覚によって同時に受けとめられる。」としている。(① p.49, p.50)

また、この筋肉感覚による感知の重要性から、身体を通したリズム教育の方法が導かれるのだが、それについては「筋肉を収縮 ( le contraction ) や弛緩 ( le décontraction ) に、身体の線を時間と空間の中での拡張や収縮に慣れさせる」ことを原則とする方法により、リズムへの直覚力 ( l'instinct ) を助けると述べている。(① p.57)この原則にもとづき、ダルクローズが、リズム指導を実践した結果「リズムを表現できる筋肉組織をもっているだけでは不十分であり、それに加えて何よりもまず想像したり分析する能力と、表現する身体の間で連絡 ( com-munications ) が確立されねばならない。」と指摘し、筋肉感覚に加えて「神経組織」の重視を述べている。(① p.58)

#### c 音楽と身体の動きと感情について

(1) 身体の動きと感情との関連は「身振りそれ自体はなんでもない — つまり身振りの価値は、それをもたらした感情によるのである。」(① p.126)や「示された感動を動きに伝達するのに十分なように筋肉感覚が発達されれば、美的活動が啓発されるであろう。」(① p.134)というように、動きをもたらす、感情や感動に着目している。次いで(2)の、音楽と身体の動きと感情についてみると音のリズムによって想起されたすべての美的情緒を態度や動作に自然に移行できるような、音楽の響きわたる共鳴や感受性をもった楽器になるべきである。(① p.106)と「音楽によって呼び覚まされた感情を身体で表現する。」(① p.149)のように、「音楽→感情→身体」の連鎖がみられる。

(1)とあわせて考察すると「感情、感動→動き」をもたらす方向性を(1)(2)共に有しているが、音楽との関連をみると、感情、情緒を想起させるものとして、音楽が位置づけられ、音楽と動きの間に感情、情緒が、中介すると考えられよう。

さらに、音楽→感情→身体の実現の努力において「この感情が、身体機能に浸透するのを感じ… (中略) ……個性的で生き生きした感情になるのを感じる。」(① p.149)や「動作は音楽の情緒を明確にし」(① p.109)というように、身体の動きを通すことで動き→感情の方向性の萌芽をみることができよう。

#### d 身体の動きによる動的造型について

動的造型とは「身体を通しての音楽的な感情や感覚の表現についての完璧さの追求は、……動的造型とか生的造型と呼ぶことのできる芸術分野にはいる。」と定義されている。(① p.133)さらに、ユーリズミックス ( Eurhythmic, rythmique ) と動的造型 ( Plastique animée ) の関係について「ユーリズミックスの練習は完全な芸術を自分自身の中に設立する。……動的造型についての訓練 ( les études ) は、ユーリズミックスの表現媒体をより調和を持った装飾的なものにし、……身振りや姿勢を洗練する。」というように、ユーリズミックスのより洗練され、完璧さを追求したものを動的造型としている。(① p.133)

また、「身体がリズムやリズムのニュアンスに関して音楽的にされ、十分満たされるようになったら、動的造型は、徐々に高尚で、それだけで足りる芸術に発展していくであろう。」のように、音楽が基盤であり、動きの「音楽化」を目的のひとつにしていることが、あらわれている。(① p.135)

以上、ダルクローズのリズム教育における、音楽と身体の動きを要約すると、

1. 音と動きの媒体としてリズムがあり、それは身体的なものである。
2. 内的聴力として、聴覚の他、筋肉感覚によるリズムニュアンスの感知及び神経組織の重視が強調されている。
3. 音楽と身体の動きと感情の関係は、音楽により想起された感情が、身体の動きをもたらすように、音楽と身体の動きの中介として感情が位置している。
4. 身体を通した音楽的感情の追求は、動的造型として音楽に類似した芸術として認められる。

以上のように、ダルクローズのリズム教育は、音楽と身体の動きの関連を、音楽リズム獲得のための身体の動きとしてだけとらえているのではなく、身体的手段化を越えて、音楽的感情と身体の動きを追求し、音楽に類似した芸術であると位置づけている。この点は、Findray (対象文献(4))で一部ふれられているが、従来のダルクローズ研究では、明確にされていない。

今回は、リズム教育論における音楽と身体の動きの関連を文献上明らかにすることにとどまったが、今後は、ダルクローズ・メソッドの分析と照合して、理論と具体的指導法の矛盾を明確にし、さらに現在の幼稚園教育内容としての「リトミック」の検討を行い、ダルクローズ・リトミックの問題点に言及したい。